

IOS（包括的矯正歯科研究会）2022年 第2回例会 抄録

ハイブリッド開催

日程：2022年5月22日（日） 11：00～17：00

会場：日本橋ライフサイエンスビルディング201大会議室

実行委員長挨拶

今回は、MFTに焦点を当てて、最新の論文や日本と海外の臨床を供覧し、明日からの臨床にMFTをどのように取り入れていくかを皆様と一緒に考えていきたい。会員発表では、包括的歯科治療においてGPと矯正専門医の視点から臨床に活かせる有益なディスカッションができれば幸いである。

第2回IOS例会実行委員長 行田長隆

タイムスケジュール

- 11：00～11：10 開会挨拶
- 11：10～11：40 アンケート結果報告
- 11：40～12：20 Pick UP Article（MFTの重要性）
- 12：20～13：10 特別講演
- 13：10～14：00 お昼休み
- 14：00～14：45 特別講演
- 14：45～15：15 質疑応答・ディスカッション
- 休憩（10分）
- 15：25～16：10 会員発表①
- 16：10～16：55 会員発表②
- 16：55～17：00 閉会挨拶

コンセンサス会議 PICK UP ARTICLE 11：40～12：20（質疑応答含めず）

演者 包括的矯正研究会（IOS）会員 小池紗理奈 先生
東京日本橋AQUA歯科・矯正歯科包括CLINIC DH山崎

矯正治療におけるMFTの重要性

MFT（口腔筋機能療法）とは、指しゃぶりなどにより二次的に生じた舌突出癖や口呼吸により弛緩した口唇を舌や口唇の訓練によって調和のとれた状態に改善する方法と定義されている。矯正歯科臨床においては特に、舌癖を原因とする開咬症例でMFTの併用が重要とされ、矯正治療後よりも矯正治療中からMFTを開始することで、矯正治療後の後戻りの防止に有効であると言われている。一方で口腔習癖を認めた場合すぐにMFTを実施すべきかどうかについては意見が分かれ、小児期の舌癖は必ずしも治療が必要ではなく、成長期以降も自然に治らず歯列に影響が出ている場合は加療を検討すべきであるとの見解もある。MFTの有効性について検討した文献は多いもののエビデンスの高いものはまだ少なく、今回のIOS例会においては、MFTにおける最新のエビデンスを調査し、IOS会員とMFTに関して真の理解を深めて行きたい。

（略歴）

小池 紗理奈

2008年 東京医科歯科大学歯学部歯学科卒業

2013年 東京医科歯科大学大学院医歯学総合研究科咬合機能矯正学分野博士課程修了（歯学博士）

2014年 日本矯正歯科学会認定医取得

2021年 津田沼さりな矯正歯科 開院

（所属）

包括的矯正歯科研究会（IOS）

日本矯正歯科学会

東京矯正歯科学会

日本舌側矯正歯科学会

特別講演 12:20~13:10 (質疑応答含めず)

演者 Dr. Liz Fairgray (From New Zealand)

リズ・フェアグレイは、30年の臨床経験を持つ言語療法士で、トリーチャー・コリンズ症候群、ヌーナン病、歯列に影響を与える染色体小欠失などの頭蓋顔面障害を持つ子どもたちや、自閉症スペクトラム障害、難聴などを持つコミュニケーションに困難を抱える子どもたちと向き合ってきた。カリフォルニアで言語病理学と聴覚学の大学院を修了し、さらに3年間サンフランシスコのベイエリアで働き、その後ニュージーランドに戻り、ニュージーランド人として初めて聴覚言語療法士に認定された。また、難聴児のオーラルコミュニケーションのためのセンターであるThe Hearing Houseの設立セラピストでもあり、オークランド大学での過去14年間は臨床業務、臨床教育、理学部の言語療法修士課程の学生への講義を組み合わせて行ってきた。

今回のIOS例会においては、歯科の分野を超えて言語療法士という立場からのMFTについて新しい知見を深めていきたい。

(略歴)

Academic Qualifications

California State University 1993 Master of Science Speech Pathology & Audiology
University of Canterbury 1986 Bachelor of Arts in Education

Professional Post Graduate Specialist Qualifications

American Speech-Hearing Association Cert Clinical Competence Speech -Language Pathology (ASHA CCC -SLP) 1993
California State License to practice SLP ,California Medical Quality Assurance Committee 1993
Alexander Graham Bell Auditory Verbal International Cert Auditory Verbal Therapist 2001

Professional Positions

Worked as clinician in San Francisco Bay Area for three years at Children's Hospital Oakland & Scottish Rite Clinic
Auckland Special Education service 1996 - 1999
Appointed Founding Therapist of The Hearing House - NZ's first (and only) oral speaking centre for profoundly deaf children 1999 – 2008
Clinical Educator at the University of Auckland 2008 to present

特別講演 12：20～13：10（質疑応答含めず）

演者 阿部恵美子 先生（言語聴覚士）

言語聴覚士(ST)からみた口腔筋機能療法（MFT）

MFTは「口腔顔面筋群の運動障害を改善する療法」とされ、訓練は歯科の臨床において舌癖に起因した不正咬合に適用されることが多い。一方、STがMFTを積極的に訓練に取り入れているとは言い難い。

この点について、STの行う「お口の体操」と歯科領域のMFTの相違点、またSTの対象と訓練を紹介し、STにとってのMFTの位置づけを報告する。

（略歴）

阿部 恵美子

2004年 新潟大学大学院医歯学総合研究科 顎顔面外科学分野 修了

2021年 東京医薬看護専門学校

（所属）

日本コミュニケーション障害学会

会員発表① 15:25~16:10 (質疑応答含む)

演者 堀内淳 先生

4本の先天欠損と2本の埋伏歯を有した矯正歯科治療ケースレポート

先天欠損歯の矯正歯科治療において欠損部補綴治療を避けて、天然歯のみでの配列と空隙閉鎖を達成して欲しいと患者から希望される場合があるが、とくに下顎大白歯部の近心移動は難易度が高く、予測実現性の高い矯正歯科治療計画の立案が困難である場合も多い。

今回の発表では4本の先天欠損歯と2本の埋伏歯を伴った男性症例にたいして、開窓・牽引やプレート型アンカーという強力な固定源を適用することにより、下顎大白歯の大幅な近心移動を予知的に実行して、欠損部補綴を適用することなく、空隙閉鎖と咬合再構成をおこなったケースレポートを報告する。

(略歴)

堀内 淳 (HORIUCHI ATSUSHI)

医療法人仙台東口矯正歯科 理事長

Director of Sendai East Gate Orthodontics

2000年 昭和大学歯学部卒業

2004年 東北大学大学院歯学研究科修了 (矯正歯科学専攻)

2011年 仙台東口矯正歯科 開設

(所属)

日本矯正歯科学会

包括的矯正歯科研究会 (IOS)

会員発表② 16:10~16:55 (質疑応答含む)

演者 松山文樹先生

顎運動を考慮した包括的な顎顔面診断に基づくインプラント治療

全顎的な咬合再構成においては、機能的・審美的な観点を配慮し施術に臨む必要があり、矯正学的な顎顔面の診断は必須である。

本発表は矯正学的な診断法に加えて、ルドルフスラビチェック教授が提唱するオーストリア咬合学の咬合理論を応用し、全顎的な咬合再構成を行なった症例を供覧したい。

顎運動データを参考に下顎位を決定、顎位誘導型スプリントおよびオーバーレイを経て最終補綴へ移行、咬合平面や咬頭傾斜角などは矢状顎路角を基準にフルオーダーで設定された。

当咬合理論についての私見の考察を加えたが、顎位の設定や診断についてIOS会員の皆様からのご指導を賜りたい。

(略歴)

松山 文樹

2004年 日本大学 歯学部卒業

2015年 医療法人社団 練廣会 松山デンタルオフィス中野 院長

(所属)

CID activeメンバー

JIADS JSCTメンバー

日本口腔インプラント学会 専修医

日本口腔外科学会

日本顎咬合学会

日本臨床歯周病学会

日本矯正歯科学会